
夜のドライブ

結城陸空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜のドライブ

【著者名】

NZコード

N8343A

【作者名】

結城陸空

【あらすじ】

あなたも身に覚えありませんか？

(前書き)

夏のホラーフェア企画の小説です。
ほかの先生方の小説は「夏ホラー」で検索すると見ることができます。

ちなみに主人公や村の名前は「遊び」です。ありえないですから。

俺の名前は、葬木死怨。そつきしおん

俺は友達と夜のドライブをしていた。

夜のドライブは気持ちがいい。

なぜかと言つと、車は少ないし、信号もほとんど点滅信号でストレスなく運転が出来る。

だから俺達はよく夜にドライブしていた。

「やっぱ、夜のドライブはいいなあ」

俺は運転しながら言つた。

「ほんと、最高だよ」

「今日はどこまで行こうか？」

夜といえど、俺は安全運転だ。会話をする時でさえ前を向いている。夜は、ドライブには最適だが、それ以上に注意しないと危険だからだ。

「そうだな、せっかくだし残虐村辺りまでいこう」「じゃあ、行きますか！」

俺は、テンションを上げて言つた。夜の会話は妙にテンションがあがつていて楽しい。多少大声で叫んでもあたりに人がいないので大丈夫だし。

「それにしても今日は暑かつたな、まだ盆の季節は暑いな

「ほんとあつかつた。まじで死にそうだったよ」

「俺も死にそうだった。でも冬の寒さは寒さで嫌だよね？」

「あついよりは寒いほうがいいに決まってるだろ。あついのがどんなに嫌か・・・」

「俺は冬より夏のほうが活発で好きだけじゃなく、夏って言えば今年まだ数回しか海いってないな、もっと行きたいよな？」

「海か〜、行つて見たい」

「今年は、去年より雨降らないよな〜？」

「そうか？去年より降つてると思ひナビ・・・でもあの日に雨降つてほしかったな」

「あの日〜？」

会話をしていると、意外と早く田舎地についた。残虐村といつ看板が立つている。

この村は、数年前、山が大火灾になり村の住民が何人か命を落とした。

俺は自分の家の近くだったということをよく覚えていた。そんなことを思い出しながら、車を脇道に止めた。

「さ、着いたぞ！」

俺はその言葉を言いながら、友達を見た。

友達は完全に熟睡していた。よく眠っている。さつきまで話していたのに・・・まあ夜も遅いし仕方ないか。

俺は、帰路につこうと友達を起こさずに、車のエンジンをかけようとした。

だが、何度やつてもエンジンがかからない。エンジンをかけようとキーを捻るごとにできる音が不快だ。

なぜエンジンがかからないのか原因を探るためにドアを開け外に出ようとした時、足になにか違和感を感じた。

俺は、その違和感の正体を確かめるために、足元を見た。

俺はその瞬間凍りついた。

足を・・・千切れで血だらけの腕が掴んでいたのだ。

それを見た瞬間、全身が金縛りにあり、声が出なくなっていた。叫ぼうにも叫ぶことができない。

足に気をとられていると、フロントガラスになにかが当たる音が何度もした。

俺は、ゆっくりと顔を上げた。

そこには無数の血だらけの手が、フロントガラスを叩いていたのだ。

俺は、頭があかしくなりそうだった。必死にエンジンをかける。ようやくエンジンがかかり、俺は思いつきリアクセルを踏んだ。エンジンが拭かされ轟音をあげている。

ついに車は動き出し、猛スピードでその場から離れる。

一体どのくらい走ったのかわからないくらい走った先にコンビニがあつた。

俺はコンビニの駐車場の端に車を止めて、友達を起こした。

「おい！起きろ！」

友達の肩を揺すつて起こさうとする。

だが友達に反応はない・・・。

そして次の瞬間、友達の首が取れ、俺の足元に転がり落ちてきた。落ちてきた頭の視線が俺の視線と一致した。

俺は、その瞬間、車から出ようと必死にドアを開けようとした。

その瞬間・・・声が聞こえた。

「ドリ」行くの?」

どつかで聞いた声だつた。だがよく聞けば友達の声ではない・・・。

「ドライブはおしまい?」

この声を俺は確かに聞いたことがある。

「残念もつと楽しみたかったのにな」

そう・・・この声は、今日ドライブをはじめたときに聞いた声だ・。
。

「それじゃあ、バイバイ」

その声が途切れた瞬間、車は激しい轟音とともに大爆発を起しした。

いま思えば、声の主ははじめから車に乗っていた。
俺は知らないうちに会話をしていた。
最初から友達と話してなんかいなかつた。

* * * *

「やっぱ、夜のドライブはいいなあ」

「ほんと、最高だよ」

「今日せむりまで行ひつか?」

「やつだな〜、せつかくだし残虐村辺りまでいひづ」

「じゃあ、行きますか！」

「それにしても今日は暑かったなー、まだ盆の季節は暑いな

「ほんと熱かった。まじで死にそうだったよ

「俺も死にそうだった。でも冬の寒さは寒さで嫌だよね？」

「熱いよりは寒いほうがいいに決まってるだろ。熱いのがどんなに嫌か・・・」

「俺は冬より夏のほうが活発で好きだけどなー、夏って言えば今年まだ数回しか海いってないな、もっと行きたいよな？」

「海かー、行つて見たい」

「今年は、去年より雨降らなくなー？」

「やうか?去年より降つてると想ひナビ・・・、でもあの日には雨降つてほしかったな

「あの日?..」

「やうか?あの日、山が大火事になつたあの日?」

(後書き)

なんか、どうかあるまいなないような話でスイマセン。
怖さもないですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8343a/>

夜のドライブ

2010年10月28日03時24分発行